The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヴィチ・カンバニ運動
Author(s)	春日, 直樹
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43021
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 2 】

氏　　名	春日直樹（かすがなおき）
博士の専攻分野の名称	博　　士（人間科学）
学位記番号	第　14921　号
学位授与年月日	平成11年9月16日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**ヴィチ・カンバニ運動**
論文審査委員	（主査） 教授　小泉　潤二 （副査） 教授　中川　敏　　教授　木前　利秋

論文内容の要旨

本論文は、メラネシアのフィジーにおいて「ヴィチ・カンバニ」(Viti Kabani) と称されてきた反植民地的で民族主義的な社会運動の軌跡と性格を、著者の収集した文字記録や口承に依拠して明らかにする。この運動は今世紀初頭にアポロシ・ナワイ (Apolosi Nawai) という人物によって組織されて以来、フィジー社会に多大な影響を及ぼしている。

ヴィチ・カンバニ運動を主題に据えたのは、主として次の二つの理由による。第一はこの運動が、オセアニア各地で記録された過去の反植民地的なあるいは民族主義的な運動の中でも、とくにその規模と持続性、影響力において際立つからである。オセアニアの歴史を概観するとき、数万人もの先住民を熱狂させ、植民地政府の厳しい弾圧をくぐりぬけて30年以上にわたって存続し、しかも終始一人物だけを英雄として保持しつづけながら、現代の独立国家を語る参照点としてもちいられている運動は、ヴィチ・カンバニを除いて他には存在しない。

理由の第二は、ヴィチ・カンバニ運動は現代人類学のさまざまな重要テーマを喚起していて、その理論的考察に向けて貴重な題材を提供していることである。すなわち、近代国家と首長制の整合性、資本主義への包摂、近代的な時間観念・歴史観の導入、あるいはメラネシアの土着的運動である「カーゴ・カルト」(Cargo Cult) の定義と妥当性といった論題が、すべてこの運動と不可分に結びついて登場せざるをえない。ヴィチ・カンバニの軌跡と性格を明らかにすることは、そのままこうした重要なテーマの検討へとつうじる。

本論は「序論」の前半部において、ヴィチ・カンバニ運動についての現在までの諸議論があまりに一面的であり、一元論的な性向を過度に帯びている点を指摘した上で、そうした研究に欠落する運転の多面的性格が、運動の指導者アポロシ自身の境界的で混交的な存在性と深く関係していることを指摘する。運動家アポロシは、植民地フィジーにおける社会的な諸勢力間の葛藤を包括し、衝突しあう諸力を彼自身へと集約させながら、英雄的な大首長となっている。アポロシは、ルカーチが描いた英雄的な「典型人物」としての特徴を体現している。彼自身は諸勢力の意識の限界から決して解放されず、独創的な革新を創造したともいえない。けれども、諸勢力の意識の限界をその身に背負い交差させてぎりぎりまで探求する中で、彼はリュシアン・ゴルドマンのいう「可能な意識の最大値」へと接近し、文

化の再組織化をめぐる可能性と限界を呈示して、「現在の世界を破り出ようとする」動きをつくりだしたと思われる。

本論は以上の問題設定にもとづき、アポロシが起こした運動の軌跡を順を追って振り返りながら、運動の複合的で多面的な性格とアポロシ自身の特異な社会的位置との結びつきを順次明らかにする。そしてその同じ過程で、現代人類学の諸論題を、あたらしい深まりをもって提起する。

このため「序論」の後半部では、運動以前の社会的文化的状況を簡潔に整理して、フィジーの諸勢力が抱え込んでいた価値や見解の対立についての分析を用意する。これにつづいて1章「ヴィチ・カンバニの創設」は、アポロシの生い立ちとヴィチ・カンバニ運動の形成、そして全土を席巻するまでの運動の拡大を描き、2章「フィジーの王アポロシ」は、アポロシの権勢が植民地政府による一年半の投獄によってますます高まり、彼の有する超自然的力（マナ）(mana) への確信をいっそう強めていって、フィジー=「アポロシの王国」(matanitu) を築いたプロセスが考察される。3章「ナ・ガウナ、彼の時代」では、七年間の流刑と復帰後の活動について、「彼の時代」(na Gauna) という言葉を中心に検討する。この1章から3章は1930年以前の運動の全盛期を扱っており、アポロシがいかに諸勢力の葛藤を仲裁し権勢を振るうに至ったのかを論じている。

4章「戦士の首長のマナ」は、ヴィチ・カンバニ運動を特色づける、カンバニ=「会社」による金儲けに焦点を当てて、アポロシの大首長としての性格を文化の持続性にのっとって明らかにする。5章「可能な意識」では、再度の長期流刑に処せられたアポロシが本土の支持者たちに送った命令などを分析して、孤島で運動を振り返った彼がどのような「可能な意識」の限界に到達したかを検討する。6章「晩年以降」では、アポロシが1946年に流刑先で死を迎えた前後から現在までをふりかえることによって、彼の運動がいかにフィジーの歴史と針路を語るための参照点としてありつづけ、人々を動かしているのかが論じられる。

以上のようにヴィチ・カンバニ運動の経過と性格を考察することによって、最後の7章「総括」が導かれる。ここはまず現代人類学の重要な論題を、6章までの議論に照らして次の順序で検討する。つまり、(1)「カーゴ・カルト」の概念、(2)首長制と近代国家の整合性、(3)近代的な時間概念・歴史観の摂取、(4)資本主義への包摂、の各論題である。まず(1)についていえば、従来の三種の見解はいずれも妥当性を失わないが、それぞれに重い留意点を突きつけられており、今後は留意点の検討を「カーゴ・カルト」として一括された各事例について積み重ねながら、各見解の可能性と限界をみさだめていくという必要が指摘される。(2)に関しては、首長についての伝統的理念は、むしろ近代国家の求める「開発」などを実現させるために活性化されることによって、その近代国家との間に対立を生んでいく、というパラドクスが呈示される。(3)では、土着的な時間概念・歴史観には近代的なそれと接合可能な要素が少なからず含まれており、このために後者が容易に受容される一方で、経済構造の理解を欠落したままで土着的な開発事業が興されてしまうという問題が指摘される。(4)では、文化の長期持続と変化の中で経済的な成功・不成功に関しての矛盾した語りがあらわれ、その矛盾した語りが相補的に使い分けられることにより、資本主義への参入が進むというモデルが提起される。

「総括」は最後に、アポロシの普遍性を英雄的な「典型人物」のそれとして浮かび上がらせる。アポロシが支持者に送った命令は、フィジーの根本的な論題を彼が洗い出して、徹底した深みまで思考を掘り下げたことを物語る。とはいえ洞察鋭い言葉の数々は、たえず二律背反的な見解の分裂をつくり出し、その分裂を超えた次元にアポロシを君臨させている。言葉の両義性と立場の分裂は、アポロシひとりを頂点に据えることによって一挙に解決する。言葉は彼の口を経て彼の「命令」として発せられることで真実となるのであり、したがってその発し手を失った人々はこれを聖書の句のように引用しあって解釈につとめる。

けれどもアポロシの言葉の解釈は、決して抽象的に論じられるのではなく、むしろ彼と運動についての多面的な物語をたえず拠り所とし、具体の裏付けをとっておこなわれていく。言葉の両義性は、その発し手の多面性と呼応しながら、真実解明の興奮を高めるのである。アポロシは確かに社会的な諸勢力のどこにも完全に絡みとられないまま、多面的な存在として生涯を生き終えた。幾つもの両義性の重なりの上に居場所を構えながら、諸勢力の競合と連携の可能性をその身一つで引き受けた。おのれの両義性によって敵対する諸力を結集させて、みずからの下に「フィジーを一つ」にしかけた。このように「典型人物」としての重要性を高度に体現したアポロシは、死してからのちも、社

会的な対立と和解、矛盾と均衡について、みずからの多面的な物語をつうじて幾つもの在りようを導き出す。彼はフィジー社会の重要問題を解決するために必要な手続きや条件を提起しつづけ、解決の糸口を用意しつづけるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、フィジーにおいてヴィチ・カンバニ、すなわち「フィジー・カンパニー」と呼ばれてきた社会運動に関して行われた、きわめて実証的かつ理論的な研究である。

アポロシ・ナワイという英雄的人物により組織されたこの社会運動は、第一次世界大戦の頃に始まり、植民地政府の激しい弾圧を受けて第二次世界大戦の頃におおむね終息した。今なお現代フィジーの参照点となっているこの運動を再構成するために、本論文は国立文書館の行政文書、教会関係者の書簡や日誌や教区報告、その他の手稿や新聞など大量の一次資料を精査すると同時に、この運動について知る人々、ときにはその中で中心的役割を果たした人々を数多くフィジー各地に訪ねて直接聞き取り調査を行っている。本研究によりヴィチ・カンバニ運動が、反植民地的で民族主義的で、土着の首長制に根ざす一方近代国家とフィジー人の発展を志向し、資本主義的に経済利益を追求する一方伝統的フィジー宗教に基づく「新時代の」キリスト教を形成するような、複雑で多面的な運動であることが明らかとなった。いわゆる「カーゴ・カルト」「千年王国運動」「首長制と近代国家」「近代的な歴史観の摂取」「資本主義への包摂」「新キリスト教運動」などに関わる重要な問題を、従来の概念枠組みにとらわれないたいへん独創的なかたちで提起し展開している。

本論文に関する公聴会は、平成11年6月29日に開催された。本人は、主査及び副査からの全体また細部にわたる質疑やコメントに対し、的確かつ詳細に応答し、これによって当該論文が長年にわたる現地調査と文献調査に基づく独自の研究活動によること、また、本人が当該の研究分野に対して先端的で重要な展望を開きつつあることが重ねて明らかとなった。

以上により本審査委員会は、本論文が博士（人間科学）の学位授与に十分であるものと判定した。